

## 学会発足の理念を大切に

佐々木 達司

一九七七年、國學院大學において開かれた本学会設立大会は、学際的な研究者を集めて開かれた熱気あふれるものであった。地方で孤立している私にとって、多くの研究者との出会いの場となった。また大会でのシンポジウム・研究発表と学会誌「口承文芸研究」は大きな刺激になっている。

三〇回大会シンポジウム「口承文芸研究のこれから」も興味深いものがあった。思想としての口承文芸研究（野村純一）、フィールドの現状から考える（酒井正子）、口承文芸研究は「落日」をのりこえたか（真鍋昌賢）など、学会が抱える課題にまっ正面から切り込んだ魅力あるものだった。いつものことだが、時間の制約から十分な討議がなされたとは言いがたいが、今後課題を提起した。

学会三十年の歴史は、口承文芸の衰退期と重なる。その変容は著しい。比較的伝承が豊かといわれた青森でも本格昔話を聞くことはむづかしくなってきた。

語り手の減少とともに聞き手の方言能力の低下も問題である。語り聞かせ運動ボランティア養成講座でのことである。地元の語り「花咲か爺」のテープを聴かせたとき、四十代の女性が「まったく意味が分からなかった」と言ったのは少なから

ず衝撃を受けた。家庭での語りが失われた今、語りはどのように変化するのだろうか。

今の子どもたちも、話を聞くことやことば遊びを好む。テレビや本の影響もあると思うが、意外に伝承的なものが残っている。形態は変わっても、物語やことば遊びがなくなることはないだろう。

ただ、フィールドでの、語り手・聞き手の変化しているとすれば、口承文芸研究もまた変更を余儀なくされる。

学会の歩みをシンポジウムや研究会のテーマから見ると、当面する課題や基礎的な課題と取り組んできたことが確認できる。基本的にはこれまでの路線を継承するのがよいと考える。それに加えてフィールドの変化に対応した新しいテーマに果敢にアプローチする勇気が求められる。

昔話は聞けなくても、伝承事情や世間話・俗信といった、その背景となっているものはまだ調査可能であろう。また、これまで積み上げられてきた調査資料の保存・公開にも十分ではない。

学会も世代交代の時期であり、若手研究者に期待するところ  
が大きい。

(佐々木・たつじ／青森県民俗の会)